

ラオスのこども通信

38号
2006年12月発行

発行：特定非営利活動法人 ラオスのこども 〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12, 303 TEL/FAX 03-3755-1603

特集 本に親しむ機会を 広げるために……2

- ラオスの教育、当時と今（後編） …… 6
- 看護人材育成から見たラオスの教育 …… 7
- インターン・ボランティア報告 …… 8
- スタディーツアー 2006 報告 …… 9
- 国内の活動 …… 10
- 事務局より …… 11
- 活動に参加し支えてくださったみなさん …… 12



本に親しむ機会を 広げるために

学校に本を置く。それだけで、子どもたちがいつでも本を読める環境が整う、というわけではありません。本へと誘う先生の役割はとても大きく、先生の意欲を高めるのは、新しい本が届くことです。今号では、学校の読書推進活動などの現状と「ラオスのこども」の取り組み、課題についてまとめました。



学校に新しい本を補充し、先生向けに実施したセミナーの最終日。学校で子どもたちを相手におこなった実習の一幕。図書かけによる子どもたち（チャムパサック県）

特定非営利活動法人 ラオスのこどもは、子ども自らが学ぶ力を伸ばしていくために、ラオスで、「絵本、紙芝居などの出版」「図書室」「集い楽しみ学べる場」などの支援を行っています。

本に親しむ機会を 広げるために

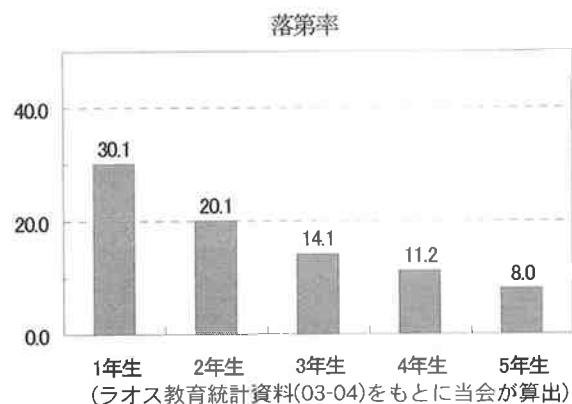
ラオスでは、子どもたちが本に出会う機会はとても限られています。教科書さえも十分に揃わない小学校も未だに多いのが実情です。

「ラオスのこども」はラオス政府に協力して1990年代から小学校を中心に図書配布、図書室開設、絵本や紙芝居の出版などを進めています。今号は、これらの「読書推進活動」と、子どもたちが伸び伸びと活動できる場づくりをめざす「子ども文化センター（CCC）／子ども教育開発センター（CEC）」について、スタッフ、理事の出張報告を元に、最近の状況、今後の課題などをお伝えします。

教育の現状

小学1年生の約半数が読み書きを覚えられず留年

多くの子どもたちは小学校に入って初めて文字に触れます。教科書を書き写すばかりの従来の授業では、読み書きを覚えるのは容易ではないようです。文字の習得につまずくと、授業についていけず、先生には怒られ、そればかりか進級テストでの成績によっては落第が待ちかまえています。小学1年生の約30%が落第し、他の学年に比べて最も高くなっています。文字の習得が大きな壁になっていると考えられ、そのことが原因で学校に来なくなる子どもも少なくありません。

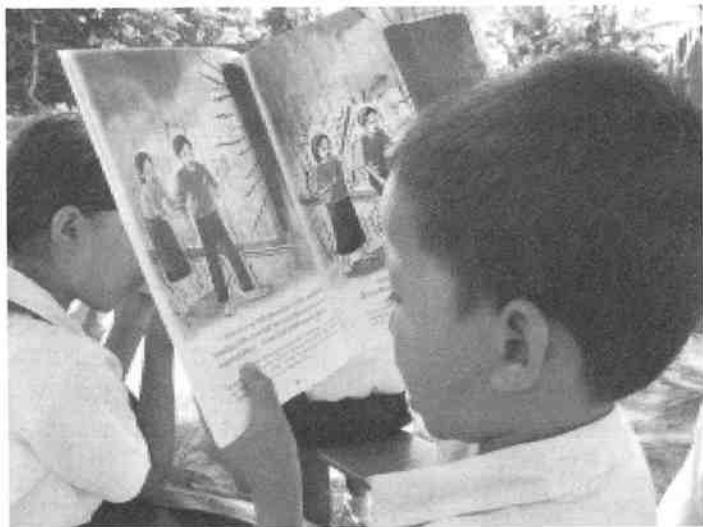


読書推進の取り組みと成果

授業に絵本を取り入れ、お話とともに文字を覚える

学校に本が備えられ、まだ本を自分で読むことができない低学年の子どもたちには、教室で先生が絵本の読み聞かせや紙芝居をします。お話が始まると子どもたちはだんだん身を乗り出していって、見入っています。高学年の読書の時間では子どもたちは好きな本を手にとって、各自声に出しながら、一人で、あるいは友だちと絵本を読んでいます。

声に出しながら読書



○サイアブリ県の小学校の先生に聞きました。
——学校に本が来て、子どもたちに変化はありましたか?
先生：子どもたちは本が好きです。本を読むようになって、教科書しかなかったときより、国語の力がついています。退学する子が減ってきました。
本に関心がない先生もいます。でも本を読んであげたときの子どもたちの反応を見れば考え方も変わるものではないでしょうか。

「ラオスのこども」の読書推進活動の成果

(2006年10月時点)

- ◆「図書箱・図書袋」(職員室などに置ぐ)の配布：2,589校
- ◆「ハクアン」(空き教室を利用した図書室)の開設：155か所
- ◆教員、教育指導官向け読書推進セミナー
- ◆図書配布先への図書補充
- ◆教員養成学校(全国8校)での「図書指導」の科目設置と教科書作成支援
- ◆出版：116タイトル、合計57万部



学校で、地域で、家庭で広がる読書推進活動

●図書室での活動を時間割に組み込む

図書室は朝や休み時間、放課後に開くほか、サイアブリ県の小学校では図書室での活動を時間割に組み込んでいます。1、2年生は語りや紙芝居、歌、ゲームなど、3年生以上は読書、紙芝居、図画工作や、お話などの文章を書いたりしています。



生徒による図書室での読み聞かせ

●図書利用の広がり。生徒が地域で出張貸出も

ラオスでは地域の図書館がほとんどなく、学校図書室を村人にも開放しています。積極的な学校は、先生と図書室ボランティアの生徒たちで村や他校へ出向いて読み聞かせや貸出をしたり、市場でも貸出をしています。

また、図書室がない学校の先生が他校の図書室に行って本を借りることもあります。ヴィエンチャン県のシータン先生は読み聞かせの楽しさに目覚め、家庭文庫を開きました。このように、地域にも図書の利用が少しづつ広がっています。



独自に図書室を開設したサイアブリ県の小学校

○図書ボランティアの生徒たちに聞きました。

——村の人たちの前で紙芝居をするの、恥ずかしくない?

生徒: 学校でも何回もやってるのでそんなことはありません。

——市場で働いている人たちにはどんな本が人気?

生徒: 恋愛物が市場のおばさんたちに人気です。

○家庭文庫のシータン先生に聞きました。

——本の良さとは何でしょう?

先生: 自分自身で知識が得られ、小学校入学前から文字や知識に触れられる、生活に役立つ知識を得られる、そして自分たちの文化を知り、年上の人を敬う心が身につくことです。

——家庭文庫を始めたきっかけは?

先生: 95年の「ラオスのこども」のセミナーで、日本では本が各家庭にあって、家庭文庫というものがあることを知りました。ラオスでは各家庭に本を置くことは難しいので、村人向けの図書室を家につくろうと思いました。

——文庫は誰が運営しているのですか?

先生: 家族で当番制にして、子どもたちが図書の貸出をしてくれています。

——どのくらい利用者が来ますか?

先生: 朝8時から夜9時まで毎日開けています。子どもも大人も来て、1日約20名。大人は農作物の作り方の本を取り合うようにして借りていきます。



子どもたちの出張活動で本に出会った市場の女性



シータン先生と子どもたち

普及と持続に向けて

学校に本を配布しただけでは本は充分に活かされません。子どもたちへの読書の普及とその持続に不可欠なのが、先生をはじめとする、読書推進活動に携わる人々の育成と本の補充です。

●セミナーの現場から

2006年10月、チャムパサック県で読書推進セミナーを実施しました。

2年前に図書を配付した学校を対象に、2度目の図書の配付(108冊)をしました。同時に学校の先生と郡の教育指導官に自分たちの活動評価と読書推進活動の再確認をしてもらうセミナーもおこないました。

講師は、読書推進活動の中心的な担い手である国立図書館の職員、教員養成校の教員、当会スタッフでした。

今回のチャムパサック県のセミナーでは、図書の登録や貸出カードづくりなど、基本的なことを理解していない先生が目につきました。今回は2度目のセミナーなので、すでに2年前、受けている先生方のはずでしたが、本のタイトルとリスト内のタイトルを照合するという作業に四苦八苦してしまったり、読み聞かせや紙芝居の実践の場面では、子どもたちに語りかけるなどができず、ただ読むだけで精一杯の先生も見られました。

ヴィエンチャン県で実施したセミナーでは、初めて図書が配布される学校が対象で参加した先生方も初めて受けるセミナーでしたが、貸出や読み聞かせの習得などに特に問題はなくスムーズにおこなわれました。

チャムパサック県をはじめ、ラオス語が母語でない先生や、小学校しか出ていない先生が多い地域もラオスには多く存在するため、地域によってセミナーの方法や内容を変えるなどの改善の必要性を強く感じました。(JICAとの共同事業)

<読書推進フォローアップセミナー日程>

- 1日目：活動の評価（各校の読書活動のよい点、改善すべき点、対策、要望）、本についての講義、図書の登録や貸出カードづくりの復習、配布した図書を使って実習
- 2日目：（作業の続き）図書の紹介の仕方、読み聞かせ・紙芝居の説明、実習
- 3日目：小学校で実習（読み聞かせ、紙芝居の実演、歌、踊り、図書の貸出）、実習の評価

(1) 人材育成 先生の本への理解がカギ

学校に図書を配付した後、子どもたちが日々、本に接するには、何よりも先生の本への理解と意欲にかかっています。配布後に利用状況を見て回ると、残念ながら十分に使われない例もあります。理由として、①先生自身が読書経験がなく、本に興味が持てない。②先生の給料が安く、他の仕事で生計をたてるため、放課後、図書室運営に時間を割けない。③図書担当以外の先生の関心が低く、図書担当が転勤すると引き継がれない、などが挙げられます。校長が読書の教育的意味と効果を理解し学校全体で取り組むことが大切です。

当会では、読書推進セミナーに郡の教育指導官の参加を呼びかけています。また、県教育局の読書推進担当官が積極的であれば、学校に図書担当専任教員の配置を促すなど、県全体で読書推進活動が活性化します。それぞれの立場の人材の育成をめざしています。

(2) 図書補充と出版 新しい本が届いてこそ

本への理解があっても、いつまでも同じ本では、意欲を長続きさせるのは困難です。また、図書が利用されればされるほどすぐに本は劣化してしまいます。新しい本の補充は、先生にとって、自分たちの活動への評価であり、今後の活動への大きな励みとなります。そのため、図書の補充に力を入れることが読書推進には欠かせません。また、新しくバラエティに富んだ本を届けるために、本の出版にも力を入れなければなりません。

(3) 地域住民参加の促進

新しい本を補充する資金を作るには、地域の人々の協力が必要です。そのため、図書室を地域にも開放し、図書の存在を知らせ、共に図書室を活性化させていくことが課題です。

(4) 学校と公共図書館との連携の働きかけ

地方ごとに独自に読書推進活動を発展させるためにも、少ない本を有効に活用するためにも、学校図書室と地域の公共図書館が連携することが大切です。その働きかけをしていきます。

(5) 会の現地事務所による資金調達

ラオス社会で、しだいに本を買う人が増え、本を販売することで資金を得る可能性が見え始めてきました。また、会の現地事務所はラオスの企業を対象に、スポンサーの開拓に取り組んでいきます。



セミナー風景 (チャムパサック県)

CCC/CEC(子ども文化センター/子ども教育開発センター)の現状と課題

当会の活動で、読書推進とともに柱となっているのが、子どもが集い、遊びながら自己表現を学ぶ場所である、子ども文化センター活動です。今回の条件の異なる3つの施設訪問で感じた活動の現状と課題をご報告します。

●ヴィエンチャン子ども教育開発センター (CEC)

子どもたちの居場所としての性格が強い他のCCCと違い、ヴィエンチャンのCECは、先生方の再教育の際、子どもたちの自由な活動を体験する場としての役目を担っています。ヴィエンチャンという土地柄、周囲の活動への関心も高く、周辺の小学校により読書の授業の一環として利用されたり、日本のインターンをはじめとするボランティアの関与などにより、新しい刺激を受けやすく、ラオスの企業がスポンサーになった合唱クラスが始まるなど、活動も活発です。



合唱クラス発表風景

●ボリカムサイ子ども文化センター (CCC)

ボリカムサイCCCは、ヴィエンチャンからバスで2時間南へ下ったパクサン県ボリカムサイにあります。現在は絵本作家になったブンルートさんが県を巻き込み、伝統舞踊や踊り、木工など子ども向けの活動をはじめたのが発足のきっかけでした。会は活動開始当初から支援を続けており、活動拠点の建物も1997年に建設したものです。久しぶりのボリカムサイは、幹線道路沿いに立派なホテルが建ったり、大きなバスターミナルができたりと、随分大きくなっていました。メコン川を挟んでタイに面することから、景気がよいようです。しかしCCCは建物が10年近く経ったこともあり、少々汚れが目立ち、なんとなく活気がありません。私が訪問した日がたまたまだったのかも知れませんが、子どもたちが集まるクラスも、落ち着きがなく、あつという間に終わってしまいました。図書室も残念ながら生き生きした雰囲気がありませんでした。



ボリカムサイCCC
の図書室

●2つの施設の比較

ヴィエンチャンCECとボリカムサイCCCの活気の違い、そのひとつの理由は運営資金にあります。会はこの7~8年、自立を促す意図から、支援額を少しずつ減らしています。大きな都市のCCCは、他の団体や自治体など支援を多様化してどうにか運営を支えることができます。ところがボリカムサイはそれができていません。講師への支払いが充分でなく、意欲的な先生が集まりにくくなっています。また、創設時のリーダーが交代する中で、活動の理念やエネルギーが充分に継承されていない面を感じました。スタッフは公務員であり、異動もあります。ボリカムサイの若い館長も一生懸命ではあるのですが、全てがスマートな感が否めません。地方都市であることから、活動への刺激が少ないことの影響も感じました。

●チャムパサック子ども文化センター (CCC)

5年ほど前に活動を開始したチャムパサックCCCに、私たちは支援をしていません。日本の労働組合などから少し支援を受けたことがあります、基本的には地方自治体が運営資金を出しており、活動は土日のみです。私は実際の子どもたちの活動を見ることができませんでしたが、後日訪問したスタッフの話では、50~60名の子どもたちが活発に活動をしていたということでした。ここでの問題点は運営資金不足と、活動ノウハウの不足です。意欲があつても、経験と情報が充分でないため多様な活動を行うことが困難のようです。



ゲームに熱中する
チャムパサックCCC
の子どもたち

●活動の課題

CCCがラオスに誕生してから10年以上が経ち、発展段階から安定段階に入っています。全てが順調に発展しているということではなく、施設によりバラツキが顕著になっています。今回気になったことは、活動理念が施設全体、どこまで浸透しているか、自らの言葉となっているかということでした。プロジェクトの「自立」はNGOにとって大きなテーマですが、私たちは少し観念的にこのことを考えていたのかもしれません。自立のための重要な要素、「資金」と「人材」「時間」に対しどこまで配慮したか、現地に任せるだけではない、現実的な時間の流れを踏まえた道筋の再考が私たちに求められています。（野口朝夫）

先生の一日

チャムパサック県でのセミナーに参加した先生2人に聞きました。「先生になったのは教えるのが好きだから」というカンペット先生とヴィシヤン先生。難しいのは、「ラオス語をきちんと身につけること」「学年が上がるごとに難しくなる算数を教えること」だと話していました。

○ノーンケン小学校（サナソンブン郡）

カンペット先生（女性）

- 5:00 起床、家族の食事作り(薪でモチ米を蒸す)など
- 7:30 家を出る。学校まで自転車で15分
昼休み家に帰って食事
- 13:30 学校に戻り、授業の準備
- 16:00 生徒が帰った後、片付けや戸締まりなど
- 16:30 帰宅。食事の用意など家事
- 21:00 就寝

1989年パクセー教員養成校卒。

現在の学校に2000年赴任。

家族は夫と10歳と4歳の子ども。

●学校の様子

児童数1年生～5年生で102名（全員が少数民族）。

先生は3名（平地ラオ）で複合学級。

カンペット先生は4～5年生担当。計43名（女子24名）。

教室には2つの黒板があり、右側が4年生、左側が5年生と少し離れて座つて一緒に勉強している。学校にある教科書は、全校全教科で50冊。うち10冊程度は親が子どもに買い与えたもので、他は学校が授業時に貸し出す。

●村の様子

ほとんどが農業を営み、もち米を入れる竹細工の日用品などを作り収入としている。テレビがある家庭は半数ほど。水道はない。

25年を語る

ラオスの教育、 当時と今（後編）

語り手：チャンタソン・インタヴォン

——先生の状況は当時と今とでは違ってきている？

相変わらずで、自分の食べる分は給料以外の収入で貯っている。あるルアンパバーンの先生は鍛冶屋の収入が教員給与の3倍くらい。どちらが本業かわからない。

——80年代、本を持っていった反応は？

何もない中で、日本語の絵本はとても喜ばれた。先生たちは、子どもたちに絵だけでも見せたいと言い、絵にあわせて自分で物語を作り聞かせるという工夫をしていた。教育省は僻地にも持つて行ってくれて、私が幼稚園を訪れるとき、ほとんどの子が絵本を見ていた。

——学校に本が入って、子どもに変化は？

読むだけでなく、文章を書く子も増えている。文章力はまだまだで、高校生でも全然、作文が書けない。とはいっても作家志望の子も出てきたのは頗らしいこと。ラオス人はもともと詩を書くのが好きというのもあるかもしれない。

——CCCの変化はどうですか？

CCCで育った子どもは、CCCの先生になりたいという子も増え、

○スウ小学校（ポンテーン郡）

ヴィシヤン先生（男性）

- 5:00 起床。畑で野菜を採ったり、菓子など販売品を仕入れに行く（小売業を営む）。
- 7:40 家を出る。学校までバイクで10分
昼休み家に帰って食事
- 13:30 学校に戻り、授業の準備
- 16:30 帰宅。農作業など
- 21:00 就寝

1985年パクセー教員養成校卒。

現在の学校に1994年赴任。

家族は妻と17歳13歳11歳の子ども。

●学校の様子

児童数1年生～5年生で196名

（少数民族はない）

ヴィシヤン先生は3年生担当。計40名（女子17名）。学校の教科書は、ラオス語はほぼ1人1冊。他の教科はほとんどない（親が子どもに買っている）。5年生までは全員進級するが、中学進学は85%ぐらい。近隣に幼稚園がないため、年齢が小さいうちに1年生に入学が多い。そのため1年生が進級試験に合格できない率がもっとも多い。

●村の様子

ほとんどが農業。米は自家用のほか、一部は売る。全世帯に電気が通り、ほぼ全家庭にテレビがある。水道はない。

◆ある小学校の授業時間

8:00-8:50 1時間目

9:00-9:50 2時間目

10:10-11:00 3時間目

11:10-12:00 4時間目

<昼休み>

14:00-14:50 5時間目

15:10-16:00 6時間目

「子どもに喜びを与える」と言ってくれる子が育ってきた。CCCを作った当初は、親が子どもに「何してるの。早く家に帰つて弟の面倒見なさい！」と、大きな声で怒鳴っていた。CCCの活動が、遊びだけでなく、本も読めるし、学校の勉強と両立できるという認識が大人に生まれた。今は親が遠いところから子どもたちを送りに来て、文化活動をさせている。先生も変わった。「漫画の本ばかりで、教科書を見なくなつては困る」と、絵本のことを言っていた。でも「勉強しろと言わなくとも、子どもが勉強するようになった」と、分かってきた。相変わらず給料は安く生活は厳しいのに、余った時間を自分の副業ではなく、子どもたちのために使う先生方も出てきた。

——逆に悪くなった部分は？

自由経済が浸透して、先生をやめる人も多くなってきた。政府に力がなく、幼稚園から大学まで個人の善意に頼っている。ラオスの教育は先生にボランティア精神がなかつたら成り立っていない。今、私立学校が次々とできて、評判のいい公立学校の先生を引き抜いて、私立ばかりが繁盛し、公立は合併ばかり。地方には、先生がやっている塾に行かないとい、生徒は進級できないという例もある。すごく矛盾がある。先生が学校での教育に集中できるような学校にならなくてはだめ。ラオスの教育は危機的な状況にあるといえる。

プロジェクト の 報 告

出版プロジェクト

『マハートマー・ガンジーの生涯』

翻訳：オートン カムインスー

14.5×19cm、表紙2色／本文1色、68p

13000部（キヤノン株式会社2500部・Ms.Tokiko Nakamura2500部・当会5000部）

インド独立の父、ガンジーの生涯とその語録。世界の歴史的な人物について知る機会を広げようと、伝記のシリーズ化の企画も検討中。



『ともだち』

作：ミーノイ（他7名）

13.5×19cm、表紙4色／本文1色、112p

5000部（JICA 草の根技術協力事業3000部、Centre de Langue(CCCL)1300部、当会700部）新人作家育成ワークショップの受講者を対象としたコンクールの入賞作品集。8名の若手作家による、14作品の短編小説を掲載。



読書推進ニュースレター『Deknoy Lao (ラオスの子ども)』

21×29.5cm、2色、20p

2000部（JICA 草の根技術協力事業）

読書推進に携わる人々による記事と子どもの作品で構成。子ども向けにはお話し、ゲーム、クイズ、保護者向けには幼児期における読書の役割についてのコラム、教員向けには読書推進活動の各地での取り組みの紹介など。編集、デザインは当会ラオス事務所です。



『いばりんぼうの針くん』（紙芝居）

作・絵：ウディ シリポン

2000部（学習院女子大学）

いばりんぼうの針くんが次々と出会うもののを刺していく最後に岩くんを刺そうとして折れてしまったというお話し。繰り返しの展開は子どもたちに大人気。



看護人材育成から見たラオスの教育

高橋圭子

2006年3～7月、ラオスのJICAプロジェクト「看護助産人材育成強化プロジェクト」に携わり、ラオス国内の看護教育に関わる問題を考える機会を得ました。

ラオスの看護教育は、現在、高卒以上で入学が認められる6つの保健学校（短大1つを含む）のみで行われ、日本でいう正看護師だけが養成される仕組みです。通常、保健学校（もしくは短大）に入学するということは、国内ではそれなりのエリートとみなされます。しかし現場で働く看護師のほとんどはそのようなエリートではありません。地方の県病院（県で一番大きな病院）では「時計も読めない看護師がいる」という話があたり、誤った医療行為を医師の代わりに行い人々の健康に害を与えること、しばしば看護師の「質」が問題になっています。というのも、ラオスのほとんどの病院で現在働いている看護師の中で、そのような教育を受けた正看護師は1割にも満たないからです。現在の看護教育システムが確立される以前に各病院で行われていた数か月のトレーニングを受けたのみで雇用され、中学はおろか小学校も卒業していない看護師がたくさんいるというのです。

現在、看護学校（短大）で養成されたエリートたちは、ごく少数が保健省などで役人として働いたりしていますが、そのほとんどが卒業後看護師として働くことなく全く別の仕事に就いたり主婦になたりしています。その理由の一つは、ラオスではほとんどすべての

医療施設が国営で、そこで働くためには公務員にならなければなりませんが、公務員になるためには政府からのQuota(新規公務員の採用枠)の割り当てが必要で、慢性的な財政不足のラオス保健省にはそのQuota枠を各病院に割り当てる余裕はほとんどないということがあります。結果、ある県病院ではこの8年間1人も新規の看護師入職者がいないといった状況が明らかになっています（その8年間に毎年その病院に付属する看護学校で100人以上の看護師が養成されているのにも拘わらず！）。

また別の理由としては、そのような高等教育を受けたエリートは特に看護師が足りない田舎のヘルスセンターなどで働くことを嫌い、都会暮らしを望んで看護師にならないという事情もあるようです。高等教育の受け皿がすくないラオスでは、保健学校も立派な高等教育の機会の場の一つで、看護学校は看護師になりたい人だけのものではないという実情もあります。

私たちは「看護師の質が悪い=教育の質を向上する」と考えたり、「看護師が足りない=看護師をもっと養成する」と考えたりします。しかし、このような現状ではいくら看護学校での教育の質が向上してたくさんの看護師が養成されても、現場では何も変わりません。教育への援助の難しさがここにあると思います。

※高橋さんは、看護師出身で、現在、保健衛生分野の国際協力の専門家として活躍されています。会の97年スタディツアーハに参加した仲間です

インターン・ボランティア報告

今年の夏もさまざまなインターン、ボランティアの方々がラオスで、日本で活動を支えてくれました。

リコーダーの穴を塞ぐのもやつとの小さい子ども
学習院女子大学生5名は、2006年の8月14日から17日間、
ヴィエンチャンのCEC（子ども教育開発センター）で、2回
目の音楽プログラムを実施しました。私たちは「音楽を通して
感性を高めることで、子どもたちの可能性を広げる」という目的
を掲げ活動の基盤にしていきました。今年の新たな企画は
2つあります。1つは、昨年のリコーダー、ピアニカの合奏
に加えて、合唱を取り入れたことです。日本語、ラオス語の
両方で歌える「幸せなら手をたたこう」を課題曲に選び、子
どもたちは発表会に向けて、歌と楽器の両方を練習しました。
2つ目は子どもたちが主体となる参加型授業として、替え歌作り
を設けたことです。グループごとに「幸せなら〇〇しよう」と、
オリジナルの歌詞を作ってもらいました。日本語の発音は難し
いようで、はじめは歌詞カードを見ながらでしたが、最終日
の発表会では全員が日本語の歌詞を覚えて堂々と歌っていました。
小さな子も自分の意見を言い、皆で共有する喜びを感じ
ていました。ユニークな歌も出て大変な盛り上がりを見せた
授業でした。子どもたちの積極的な意思を尊重したいとの思
いから、リコーダーの穴を塞ぐのもやつとの小さい子まで多くの
参加者を受け入れました。どの子も自分自身の可能性に
気づき、そこから自分で考え、創り出すようになりました。子
どもたちのこういった成長が見えた時、プログラムの意義を感じ
ることができました。（藤堂めぐみ／学習院女子大学）



子どもたちにリコーダーを教えるインターン



ヴィエンチャン事務所の昼食風景

汗だく、声をからして麻布十番納涼まつり

ボランティアとしてラオスのこどもに参加するようになったのは、3年前の麻布十番納涼祭
りがきっかけでした。今年も汗だくになり声をからして3日間ラオス料理を売り続けました。
会場内での販売場所が変更となり、今年はテントの前に全く行列ができず、初日から好
調とはいえない売れ行きが続きました。それでも多くの学生ボランティアが参加されて、テ
ントの中に例年以上の活気があったのか？お客様がそれにつられたのか？最後はほと
んどの商品が完売することができた。よかった、よかった。

手伝いに来てくれた留学生にラオス語の呼び込みの宣伝文句を教えてもらって、大変な
がらも楽しい時間を過ごすことができました。（脇田俊文）



スタディーツアー2006報告

会員の方に活動への理解を深めてしていただくことを目的として開催したスタディーツアー。16名が参加。事前研修を3回行い、9月14~20日の行程でした。参加者の方々がさらに積極的に会の活動へ参加する大きなきっかけとなったのではと成果を実感しています。



私立小学校の授業風景

●小学校における図書利用の課題－教員の問題から

今回のスタディーツアーではそれぞれ条件の全く異なる3校の小学校を訪問することができた。首都であるヴィエンチャン市内にある公立小学校、私立小学校、首都から車で3時間程度離れたヴィエンチャン県ヒンフープ郡にあるハクアンの開設式を迎えた公立小学校の3校だ。

ハクアンの開設式後には、小学校教員向けのセミナーが行われていた。セミナーでは、図書とは何かという導入から始まり、図書の貸し方、図書の登録の仕方など、実際の小学校図書室の運営に関する講義が行われていた。受講生である小学校教員は、熱心に受講していた。

ラオスではまだまだ小学校図書室は一般的でなく、図書室の運営を担う教員自身が子どもだった時に図書を利用したことがないで、このようなセミナーが必要となってくるのだそうだ。

また、ヴィエンチャン市内の私立小学校は公立小学校に比べて学費が高い分予算があるので、その気になればすぐにすぐに設置できると思っていた。しかし、図書がショーケースに平積みされているのを見て、簡単にはいかないなと思った。偏見かもしれないが、ショーケースに本を平積みしているということは、子どもたちが活発に図書を利用するとは考えにくく、どのように図書を小学校で活用していくかという方法をこの小学校の教員は知らないと思ったからだ。

今回ツアーに参加し3校の訪問を通して小学校に図書がないことを実感した。しかしそれ以上に、子どもたちに図書を導入する小学校教員が小学校で図書に触れた経験がないことに問題があるのではないかと感じた。

自分たちが経験したことないことを子どもたちに行うことは非常に難しいと思う。そのためにも今後も教員に対するアプローチは非常に重要になってくると感じた（鳥澤裕介）

※『ラオスのこどもスタディーツアー2006報告書』(500円)を購入ご希望の方は事務局までご連絡下さい。

●31年ぶりのラオス再訪

時間の流れは何を変え、何をえないのか。今回、首都ヴィエンチャンと少し離れた農村地帯を訪問した。都会との経済的な格差はもちろんあるのだろうが、大きなパラボナアンテナがある家がかなりあった。書物、新聞など、文字を活字に変えて印刷、出版するという情報伝達手段を飛び越え、音、映像という伝達手段（電波、通信）テレビ、携帯電話、インターネットの世界に急速に入ってしまうのではないか。首都ヴィエンチャンには携帯電話の中継基地の電波塔が林立している。一方で日本のような出版物、新聞、雑誌が町にもあまりない。本屋さんがない、本がない、小学校で使う教科書すらない。この落差をどうとらえたらいいのか。ラオスの人たちの日常着る服装が、民族衣装から洋服に大きく変化したようだ。中央市場にはあふれるばかりの中国から輸入の洋服が売っていた。いまや、民族衣装は貴重な外貨を稼ぐもの？日本と同じように特別に着る貴重なものになりつつあるように見える。市場に売られているものも、自国産物の流通の市場から、外国からの電気製品、雑貨品など、輸入品を売るスーパー、そして、外国人にお土産を売る場所に変貌している。こういった変化をどのように考えたらいいのだろうか。（清水永一）



〈スタディーツアーワークショップ〉

日付	行動	宿泊地
9/14 木	21:00ホテル集合・顔合わせ	ヴィエンチャン
9/15 金	午前:ヴィエンチャン事務所訪問 午後:ヴィエンチャン市内私立&公立小学校見学 夕方:市内日本語学校見学&交流	ヴィエンチャン
9/16 土	午前:ヴィエンチャンCEC見学&交流 午後:市内観光・ホアイホン職業訓練センター見学	ヴィエンチャン
9/17 日	午前:シーサタナークCCC見学&交流	ヴァンヴィエン
9/18 月	ヴィエンチャン県の小学校の学校図書室開設式見学 バーシー体験、読書推進研修見学	ヴァンヴィエン
9/19 火	午後:ナムグムダム&塩田見学 夕方:ヴィエンチャン事務所スタッフと夕食会	ヴィエンチャン
9/20 水	午前:自由行動 午後:ホテルにて解散	

国内の活動

2006年6月～10月

合宿

私たちはどこに向かうのか

7/8～7/9 早稲田奉仕園セミナーハウス
当会は来年で25周年を迎える、識字教育を中心に現地で着実に成果を上げています。その一方で、ラオス社会が急速な変化を遂げており、今一度「私たちはなぜラオスで教育支援を行っているのか」を時間をかけて話し合うことで、基本に立ち返り、これから向かう先を探る機会が必要と感じ、合宿を1泊2日で行いました。会員、理事、ボランティア合わせて21名が参加しました。

1日目は、今までの活動を振り返った後、アフリカ地域開発市民の会(CanDo)の元駐在員藤田春子さんをお招きし、ケニアで、住民の意識に働きかけるという当会とは異なる地域、視点での教育支援を行っている他の団体のお話を聞くことで、あらためて当会の活動を見つめ直しました。それを踏まえて2日目は「私たちはどこに向かうのか・私たちがすべきこと」を話し合いました。

そこでは「少数民族やさらなる僻地へのアプローチが必要」「都市の子どもたちへの対応」「留学生との連携」「CCCのプログラムの充実」「本の流通システムの確立」「青少年へのアプローチ」などの意見が出ました。

合宿後、参加者からは「これまでの活動の経緯がよくわかった」「議論が錯綜したが、その結果、取り組みの原点が見えた」などの感想が出されました。



イベント

ご来場、ご参加、ご協力いただいたみなさん、ありがとうございました。

●麻布十番納涼祭り国際バザール

8/18～8/20 一の橋親水公園（東京都）
猛暑にみまわれた真夏の3日間、今年もたくさんのラオス人留学生とともに本格ラオス料理屋台を出店しました。ケーンペット（ラオス風ココナツカレー）、ハープ風味鶏唐揚げ、ナムワーン（ラオス風冷ぜんざい）、マンゴージュースを販売しました。ボランティア総勢77名（うち留学生24名）が参加してくれました。



●グローバルフェスタJAPAN2006

9/30～10/1 日比谷公園（東京都）
日本最大の国際協力イベント。一般展示ブースではラオスでの活動展示と、手工芸品の販売、その他学習院女子大学のインター報告やスタディーツアーのミニ報告会、ラオス語講座紙芝居の実演なども行われました。飲食ブースではハープ風味鶏唐揚げとホットナムワーン（ラオス風しるこ）を販売しました。



ラオス語絵本プロジェクト

●沖電気グループ「ラオス語絵本をつくりラオスの子どもたちに送ろう」

社員のみなさんとそのご家族、学習院女子大学の学生、合わせて35名が参加し、60冊の絵本にラオス語翻訳貼りを行いました。翻訳貼りの前に、ラオスクイズ、簡単ラオス語講座、DVDの上映とチャンタソンによる活動報告、ラオス語絵本の読み聞かせを行いました。休憩時間にはラオスコーヒーを楽しみました。絵本は学習院女子大学のみなさんがラオスに届けてくださいました。



コンクール

●第8回花のまち可児手づくり絵本大賞 ラオスからの応募作品に「教育奨励特別賞」

ラオスから25作品の応募があり、例年に比べ、量も増え、格段に質が向上したことから、「ラオスのみなさん」としてラオスの応募全作品が見事「教育奨励特別賞」を受賞しました。留学生やボランティアのみなさんが翻訳作業を手伝ってくれました。



事務局より

<ラオス事務所の動き>

6月
6/17 BookParty イベント協力<CECにて>
6/23 Japan NGO ミーティング(JANM)出席 (赤井)
6/30 International NGO ミーティング出席 (ミンクワンカム)

7月
7/6 事務所スタッフ会議
7/13 JICA 草の根技術協力事業 四半期報告会実施
7/21 事務所スタッフ会議

8月
8/9 学習院女子大学ラオス国際協力研修受入
8/30 Japan NGO ミーティング(JANM)出席 (赤井)

9月
9/6 日本大学国際関係学部金谷ゼミ研修受入
9/8 「国際識字の日」イベント出席 (ミンクワンカム・赤井)
9/11-15 HA146～148 開設<カムワン県>
9/16-20 ラオスのこどもスタディーツアー実施
9/18-22 HA151～153 開設<ヴィエンチャン県>
9/25-28 HA158～159 開設<ボリカムサイ県>
9/26-29 HA149～150 開設<ルアンナムター県>
9/29 Japan NGO ミーティング(JANM)出席 (赤井)

10月
10/5-9 MP 研究会 現場視察派遣受入
10/9 事務所スタッフ会議
10/8-15 JNNE ライフスキル・マニュアル調査受入
10/12-13 特定図書室設置トレーニング (立正佼成会金沢支援)
10/18-25 読書推進セミナー (フォローアップ) <チャム・サック県>
10/30-11/2 HA156～157 開設<サワンナケート県>

*CEC=子ども教育開発センター、HA=学校図書室 (ハクアン)、JNNE=教育協力NGOネットワーク、CCC=子ども文化センター

<東京事務所の動き>

6月
6/11 理事会、運営会議

7月
7/1 沖電気でラオス語絵本づくり体験 (黒古・猿田)
7/8-9 ラオスのこども夏合宿 2006
7/10-8/9 ラオス出張 (チャンタソン)
7/15 スタディーツアー事前研修
7/22 麻布十番納涼まつりボランティア説明会
7/29 スタディーツアー事前研修

8月
8/5 大田区ボランティア説明会参加 (猿田)
8/13 運営会議
8/18-20 麻布十番納涼まつり国際バザールに出店
8/22 ユニセフ・サマースクールで講演 (黒古・猿田)
8/26 理事会

9月
9/2 麻布十番納涼まつり反省会&打ち上げ
9/9 2006年度通常総会
9/12 JNNE ライフスキル教育マニュアル開発事業タスクチーム会合 (森・猿田)
9/14-20 スタディーツアー (黒古)
9/30-10/1 グローバルフェスタ2006に出展

10月
10/8 理事会、運営会議
10/8-10/15 ラオス出張 (森)
10/8-29 ラオス出張 (猿田)
10/13-22 ラオス出張 (野口)
10/28 キヤノンチャリティブックボランティア (黒古)

■第4回通常総会報告

9月9日（土）2006年度通常総会を、活動会員35名（うち11名書面評決、4名委任状）、賛助会員3名、ボランティア1名参加のもと、馬込区民センターにて行いました。

この1年間は、プロジェクト運営は比較的順調に推移したのに対し、組織運営の強化、自己資金の調達などは改善への動きが出てきたものまだまだ充分といえる状況ではないことなどが説明され、第4期事業報告、会計報告が承認されました。監査報告では、監事から、運営面プロジェクト面、ともに事業の一つとして評価に取り組むべき、との指摘がありました。続いて、2006年度事業計画・収支予算についての報告も行いました。

総会終了後、参加者の交流会として、国会を模したワーキングショップを行い、今後の活動の方向性について活発な意見交換が行われました。

活動報告、会計報告などは別添2005年度年次報告書をご覧下さい。

イーココロ!募金のお願い



イーココロ！というウェブサイトをご存じですか？このサイトを通せば、誰にでも手軽に、そして無料で、当会の活動を支援していただけます。イーココロ！を通しての支援方法をご説明いたします。

①イーココロ!サイト (<http://www.ekokoro.jp>) にアクセスする
②無料会員登録を行う
・「募金サイト イーココロ！」とは？」という窓口をクリックし、「無料会員登録」という登録の入り口をクリック。
・「無料会員登録」のページとなり、まず「寄付先NGO」を指定します。そこで、「子ども支援」→「ラオスのこども」を指定してください。登録欄に必要事項を入力。
③「ポイントGET クリック募金」に挑戦!!
・各会社のバナーをクリックしていただくと、1000ポイントたまつた時点で当会へ1000円が寄付されます。
④「ショッピング募金」「アクション募金」に挑戦!!
・このサイトを通して資料請求やインターネットショッピングなどをしていただくとポイントが集められます。
手軽にできる当会への財政貢献です！！ぜひご協力下さい。